



086479-000-1

特64-42

百人一首

井上 勝五郎 / 刊

M19

DBD-1330

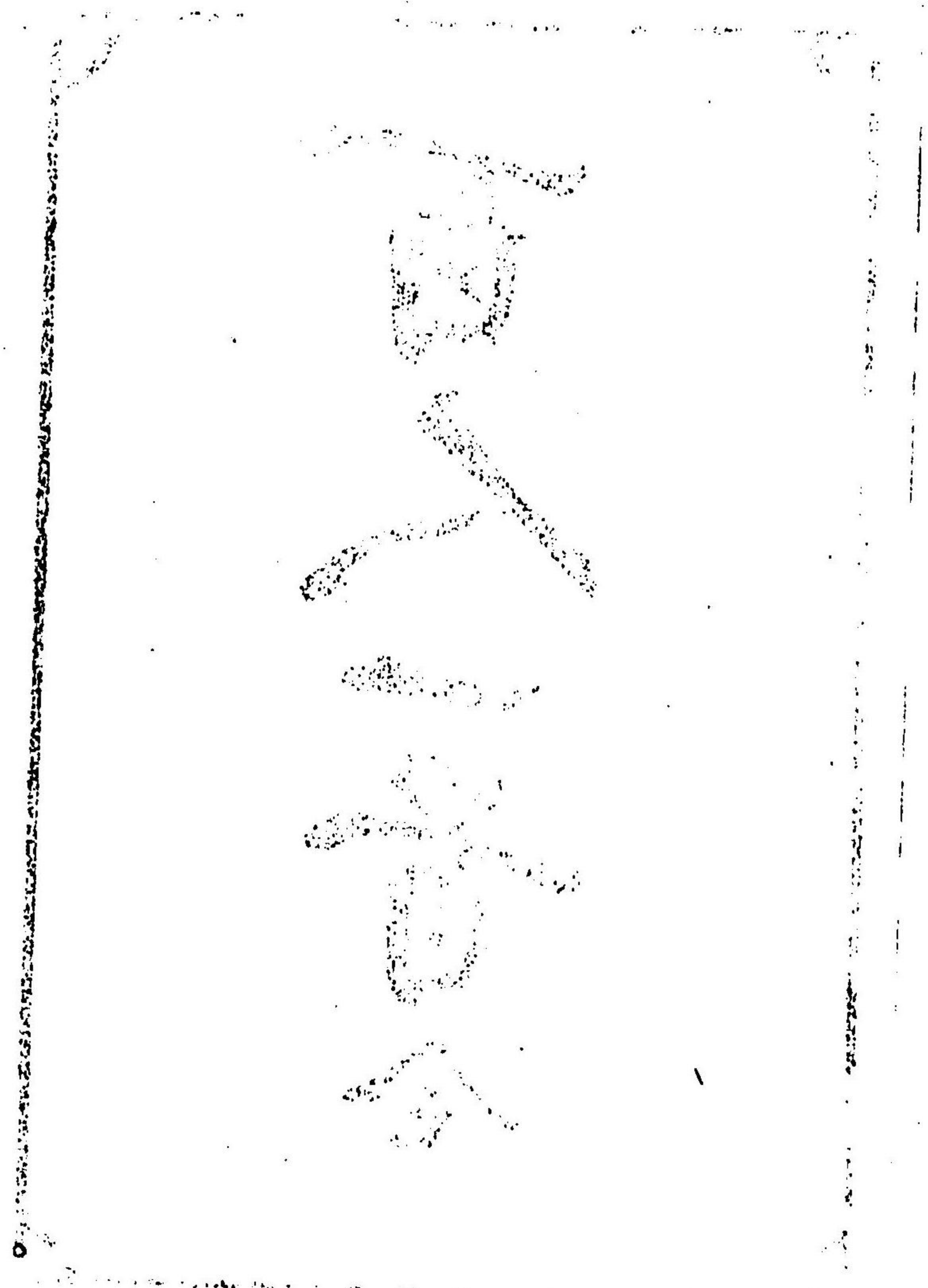


特64
42



百人一首全

明治十九年六月二日內務省贈付



文屋彦秀

名よめを、おちろりぞ
女も我おちよ

まゆ人よ

左宗業平
相臣

後めおの

はら城

いぢりあはる

成まる

小町

そのの



お前の谷よ

うけをり

てあいのくれ

はあまんあ

おとあま

おとあま

おとあま

おとあま

おとあま

おとあま

おとあま

おとあま

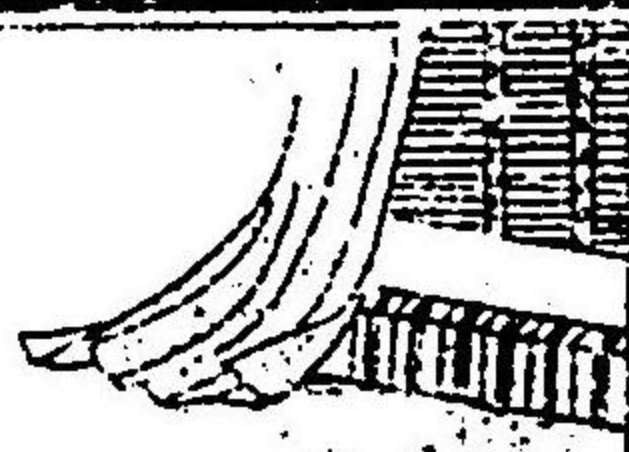
おとあま

おとあま



桐壺 

いとける死
まのもと
あはれ世を
ちるる公
むらひ
こめ
てわ



天智天皇
秋の因れ
かき乃
岩茂
あらうこ
我ら海も
でい
あまのまき
つ



月夜行

定家卿歌撰之圖



関

花散里
 こらこれの
 まさあつ
 うしき
 不とまいた
 花さる
 ささふ
 こら
 てそ
 むく



参儀
 志田の系
 八十番
 こた
 出ぬ
 ひと
 人あな
 海
 古北
 けり
 系

神
 非か
 ちの
 杖も
 の残
 けふ
 まま
 あら
 ささ
 さそ



せ
 丸
 のま
 やこれ
 回く
 も
 別
 せ
 ても
 知る
 も
 志
 らぬ
 も
 あ
 らぬ
 の
 せ
 ら

川
乙女

とく
かきびぬぐ
あまろそぞ
ふりよの
とよまひ
あま



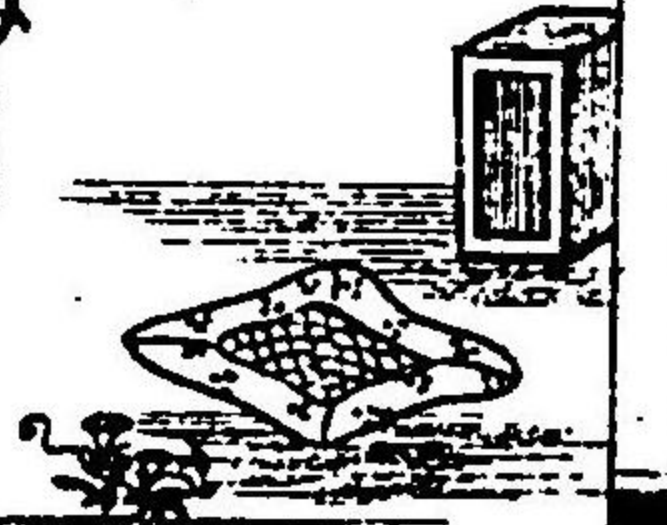
開化奇人譜

素性法師
今ころん
まのり
長月の
有明此
清い



川
朝顔

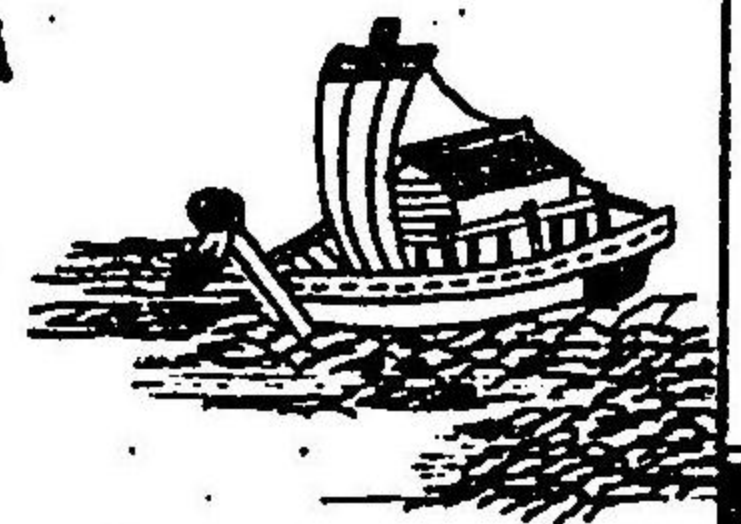
み
わりの
あまみの
花のさつ
ま
らん



開化奇人譜

元良親王
偶ぬれが
今ま
雑波
あま
あま
あま





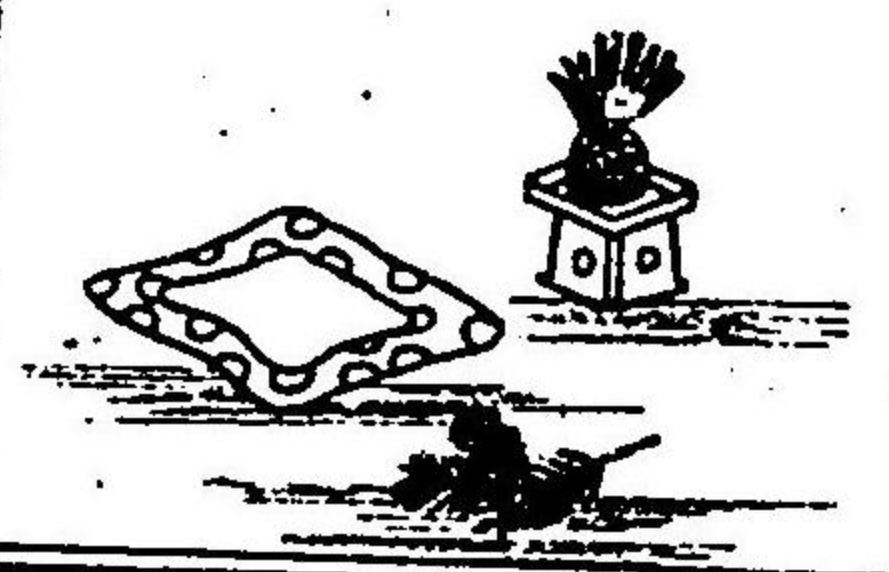
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ

玉葛

閑花百人一首



文屋彦秀
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの



あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ
あひ

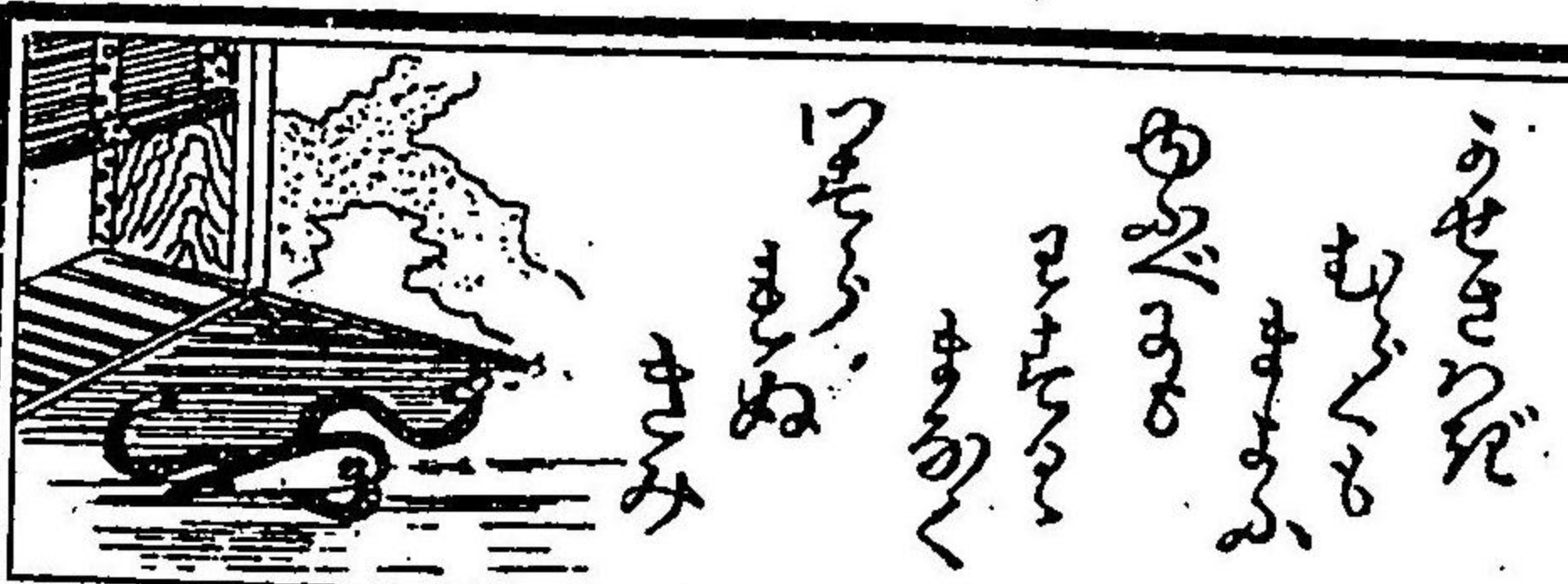
初音

閑花百人一首



大江山
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの
あひのあひの

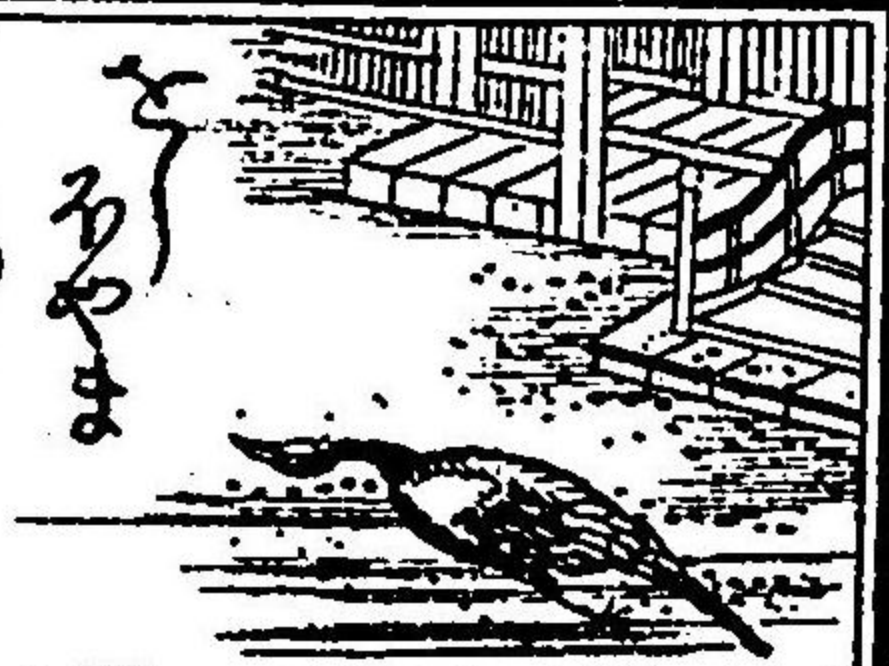
野分



源宗子胡臣
山ざりては
淋しき
はるけり
ける
人めも
かきぬと
ねも入



行幸



九河内躬恒
心あて玉
おらん
まら
おら
あや
ら幸



源宗子胡臣



いまだとて
 やさしげなと
 あれなるる
 ちのちの
 ちりよ
 日れと
 われ
 るか



さうの人のこれなり
 坂上は是則
 新同らま
 あり
 有明の
 服は
 こま
 まま
 ち
 あり
 考らゆ



蘭

あ
 つま
 ぬ
 ふ
 あ
 か
 う
 を



有明は
 法
 忍
 こ
 業
 も
 あ



卍 若菜下

ゆきや
みち
月ま
そ
ま
ん



紀貫之
人
者
古
む
自



卍 若菜上

小
ま
ひ
の
の
や
は
む
あ
ふ



藤原奥風
誰
新
せん
の
む
あ
あ



陽
百
人
百

白宮

あつつか
これよ
といは
いづみそ
ちりめも
はせぬ
あふぬ
そのあふ



清原元補

ちりめ
あふぬたれ
このこまふ
袖成
あふ
はるまの
まゆら山浪
こあしとほ

紅梅

あつて
あふぬ
その
うめよ
まうらひ
あふぬ
あふぬ



中納言敦忠

あひ
逢見ての
あふぬ
この
心ふ
くら
ぬれい
むの
あふぬ
おのなまうらひ

開元二年八月

卍 絶角

あけ
まきの
あつた
ちんり
むんい
おの
とら
ふ
あ
あ
あ



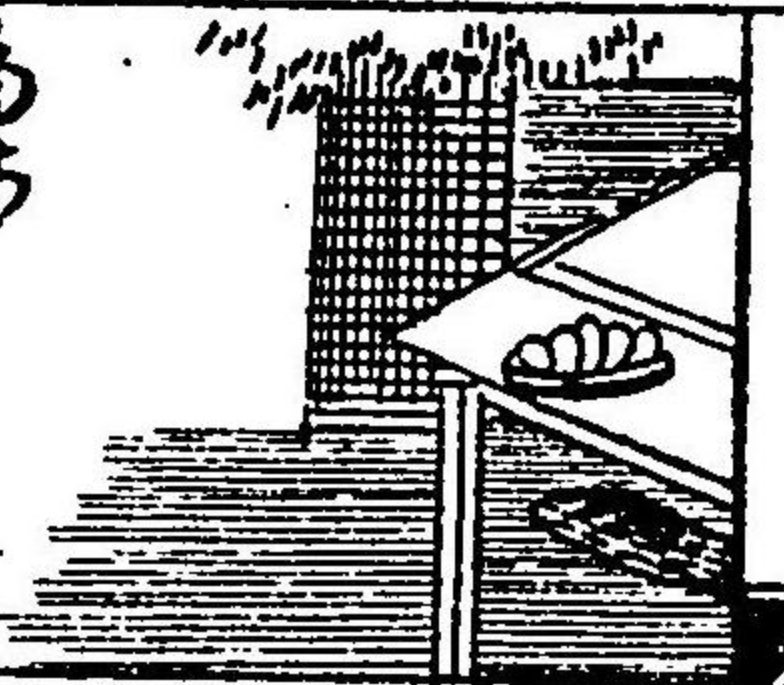
恵度法師
八重藤
まも
かどの
淋
人
秋
あ
あ
あ



月夜可人

卍 椎木

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ



曾孫好忠
ゆら
か
か
か
か
か
か
か
か



開村百人一首

十一

女大子
 一夫女子成長し
 て他人の家へ移
 男が姑ははくあ
 るのをまじり男子
 するの親のさし
 候はまへくは父
 母を託せしと恣
 びまめはたまの
 一あはれとせす



大納言公紀

夢浮橋
 のり
 くらぬる
 くらぬる
 くらぬる
 くらぬる
 くらぬる
 くらぬる
 くらぬる



儀同

ありてはふもふ
 おのひさうれん口
 絶多く人よえま
 人を恨み我身は
 誇人を清り笑
 ひ我人は誇り
 新るる人
 の道より一まほ
 あり女らうた
 和らぎてふひて



大貳三位
 ありまな
 有る山
 おのひの
 ささ系
 人残
 念はせりまほる

開権百人一首

七六

貞伝不情あつく
 静るるを淑とす
 女子ハ稚叶より
 男女の別をい
 きて後初め
 裁きしる事を
 見まじしむ
 庵まじしむ
 のれり男女ハ
 席を向く



赤深清の
 屋まじしむ
 寐ふ
 のち
 ささ系
 かさか
 目まじしむ
 うま

開権百人一首

どのもまゝに
 同く申す事
 申す事
 洗せしむるの
 洗せしむる事
 毛をすり手
 申す事
 申す事
 他人のいふは



小式部内侍
 大江山
 母の
 父の
 天法

及も度更婦元
 申す事
 申す事
 申す事
 申す事
 申す事
 申す事
 申す事



伊世の
 大補
 申す事
 申す事
 申す事
 申す事
 申す事
 申す事

目録
 目録
 目録

能くはねむ
 むくもさくら
 とる回舞のま
 まさし〜或
 まあしあわら
 まあしあわら
 まあしあわら
 まあしあわら
 まあしあわら
 悟余深きれハ



去りてあはれ
 痛あまらさ
 子はあまは
 なくおひさ
 を親おと中
 ありてあは
 れしものあ
 去りてあは
 盗めりあは
 去りてあは



去りてあはれ
 盗めりあは
 去りてあは

羨なり女二夜
 嫁して其家と
 出されしをまふ
 まいひのまきあ
 まは嫁と女の
 なるこころひて
 大なる辱や
 一女子の我あり
 ありとる家
 父母とらさる



三條院
 ありあも
 何らうが
 深世
 ありらへが
 こひし
 の家なき
 おまは月哉

孝とけし心程
 なることばも
 夫のあま行て
 お嫁を我親より
 ちきりて原せ
 しく教ひ孝けり
 とあましく親
 のこゝれなき
 男の方と寝る
 なるまふ



能因法師
 ありらふく
 こもろ
 三の
 山の
 お
 の家なき
 をたし
 河の
 あり
 なるまふ

開元七年八月
 十

かつれ船冬見
 舟と夜うす
 嫌のうは初き
 茶と煮のうす
 老若嫌の命あ
 うる情と形ひ
 ては且うす万の
 車馬が姑三回で
 其後小娘をう
 買姑若とれを信



良遣法師
 淋うさたに宥
 とま出で
 肥まふ
 づくも
 ねまふ
 あまふれ
 ぬふくれ

と神話よる悲恨
 車ふるれ孝哉
 去ん珠を淨
 白くは後のうす
 是れよくな信
 そのや
 一婦人分別小言者
 かしまさる人
 思ひ致す情と情
 しんうらな信



大納言 徑信
 夕されが
 門田乃
 あいの
 まあやふ
 情風ささふ

日用七百八十一首

廿六

一孔勤なり夫
 少す是女子弟
 世礼なまふる
 礼をうた妻を
 不悪よりてふ
 子福り和順を
 立まはるし教
 小射をうた教
 人ほふよ首ま
 くとぬの道ハ



吉子軍
 多ししの
 澄此
 あい
 神此
 ぬれも
 こりきれ
 祐子内親王宮紀傳

の教訓あらは
 主作と教へん
 教へりさ事
 八丈は向くその
 介多我法く
 まは同車あら
 西しくそふ
 庭と其をそ
 徳をうたふ礼
 なりまき



若冲納言道房
 高砂乃
 尾止此
 様
 されふ
 遠山此
 ありま
 ありま

月七百人

腹を割るゝ死を
 忍びて死せしむ
 うらみ神を道
 ぶくく女をま
 とくくまをま
 とまふさうひて
 とれをう我父
 辱らるん
 兄を女をまの
 兄弟をまをま



源俊賴朝臣
 うらみのまを家
 人残
 初此
 此れろ
 ちち
 かきとらな
 此れらぬまの残

故をうまの親
 死に清くも傍の
 心を男娘の心を
 皆て我々の心を
 をまらうかたに
 睦まじくをまの
 嫌の心をしけ
 ままの死を親を
 終るまををし
 故をまの死を



孫系基俊
 死に清くも傍の
 おまじし
 さいせもが
 空海を命
 おまじし
 秋をまの死を
 終るまををし

月夜百人一首

ちかぢかぢ
 へーお見舞い
 へん
 一様姫のふゆか
 後すうたの男
 姫記のふゆか
 一様姫のふゆか
 姫記のふゆか
 そのふゆか
 ちかぢかぢ



ちかぢかぢ
 てまは涙も
 路りまのや
 ちかぢかぢ
 ちかぢかぢ
 ちかぢかぢ
 ちかぢかぢ
 ちかぢかぢ
 ちかぢかぢ



叶の邊へ
 あふらぬ秋風と
 暮ゆく静けさ
 うけてまはる
 寂々たるあはれ
 一言清き情を
 くらげのまはる
 ことごとく
 のよみあはれ



源兼昌
 清路の
 かよふ
 傷の
 聲よ
 歳夜寐
 酒戸の
 ぬ

夕の邊へ
 清き情を
 くらげのまはる
 ことごとく
 のよみあはれ



大京を夫に
 秋風よ
 ひく
 書は絶る
 もよみ
 月の影
 此

開元元年八月

ちるよく記夜ハ
 遠くを懐とるハ
 寐をて家ハ
 うらの事ま心さ
 目ひて織籠繰
 緋をえくくた
 心茶酒をたぬ
 香くは花舞
 妓小舟津子
 理あとの流と



ああや
 ら舞
 心も
 志らまじ
 舞妓の
 今つれや
 物残ころり
 侍賢門院堀川

多々年残見多
 へんはなをまを
 都て人の多く
 在る西四十殿
 より内におまう
 けへうた
 一重観杯の事お
 迷て神佛と
 汚し近存懐お
 祈くまを只



後徳大寺大居士
 不とくをまじ
 鳴ける
 海む
 まぶ
 まる有明の
 月ぞ
 残れ家

人より初を越
 ても時ハ誘は
 とも七律佛ハ
 ち誘ふ之ハ
 一人の妻と結て
 るそのを能
 保くハ妻の
 仍あし故情
 る好とあて破
 る方子候ふ心



道因法師
 ねむい徒
 さてるも
 命の
 有
 ものを
 うゑふ徒
 ぬハ
 まいごい
 ありら茶

妻とあはさうに
 後飲食をの
 才の眼をみる
 ひ田てあさる
 うま
 一若くはあまの親た
 友達下初おれ
 少くは男かうら
 ちいさ相治一七
 ちんか男女



皇太后宮女
 世に中よ
 道こそね
 まくれ
 名ひ
 りる
 山崎貞一
 麻子
 吟みさし

言成勤く汝は
 家親の才成勤
 為り此世許る
 少く何方とり
 為るは成勤は
 其のすくうと
 一女は我親の家と
 續て男姑は
 あやとて成勤
 家親より大

西行法師
 南無阿弥陀仏
 月やわ
 柳成
 かくち
 かしち
 我のこころ



切まおのひと
 孝りともし
 嫁とて後我
 親の家はた
 真も帯あて
 増七徳の家
 うらま使成を
 して言ひとな
 走くゆら我
 里のよれ事と

寂蓮法師
 ひぬ
 秋長



西行法師
 寂蓮法師

偏りと横たう
 魚を食
 一丁初あまこた仕
 ふらふらの事
 自ら辛芳を
 て勤うと女の仇
 泣あり量姑此
 為子衣と縫ひ
 食と潤くま
 けくくとねと



難波江の
 あし此
 刈庭乃
 ひとよ
 由へ
 糸を
 けくくとねと
 こしひこ
 皇嘉門院別當

西を帝と掃子
 と首汚と洗ひ
 少配の内二居て振
 ぬくもあつた
 一丁女とふまを
 用ひ一三甲ひ
 るき下落八智し
 悪くしてあま
 心ゆくおりの
 洋匠の女の男



式子因親王
 玉此緒よ統あが
 あつた
 志のあは
 こまの
 まる
 まる

開元百人一首

四十五

妖嬈なと我んり
 合ぬ来りん様
 小津よりゆきてわ
 きんやて者のめ
 と魚よりゆ人とし
 智恵あましくしき
 を依してふむす
 み出来あしえ
 未だのぬいみか
 化人るまはうみ



かまらば
 以らる
 ぬれ
 深き
 神
 あまのれ
 せしほの
 見えまわれ
 りんぶんのいふ
 殿富の院大浦

板を思や成格
 吾事やまは様
 て下女の初と伝
 して大切なる時
 袂の枕こと落
 ぬるよは若下女
 務く多しをを
 夢あまのるま
 早く返出一の
 やうれ老を必親



後京極権政前大政大臣
 茶あまの
 霜松の
 さむしころふ
 衣
 か
 ひ
 かも
 ねん

花の中をさす
 けしきけきと
 花をひとれるも
 のよりさす
 又早き者と使
 小いまよふ人
 り多し一先我
 ゑり思ふと
 ちハ物くしき
 後



二條院後波
 我袖は
 志やいふ
 神の
 石は
 人こそ
 加りて
 後

開花百人一首

四六

花の田あふす
 西平あふはち
 りひさて深り成
 花をさす
 心のうちを憐し
 て外は八行観と
 全訓てあふ花
 花のさす
 車はあふ花



鎌倉右大臣
 花の中を
 花をさす
 花のさす
 花のさす
 花のさす

開花百人一首

車ともあらず
まことの如く
ふともあらず
史我子れ愛と
成るるも車とも
知れ料もねえ
と知るるも
証あもをぬて
森牙独りえ
お思と入り

入道若大政大臣
はなとせ
あらしの
座の
登
あらし
ぬりぬ
このあ
我身ありり



憎ま休まれと
いふ我子れ他と
なれと我子れ
多しとあま
ゆし後者
平不溺き
あしつ人
いふはる
牙成道て夫不
はふ一古の

権中納言
あぬ人
中納言の
浦の
ゆふ
あ
屋くやも
あしつ
身まこられ



清の女子も春
 二日春のりふ
 竹まじりこひの
 是と別の日ま
 女も花もあは
 小美丸もあま
 も又もあま
 春代はあま
 ここのあま
 小美丸もあま



おろさんり
 二三位家澄
 風をよめ
 よあられ
 小川の
 夕川
 みるたが
 乃
 ありまら

山も春もあ
 又もあま
 日て人もあ
 とる春はし
 てあまもあ
 ぬめくもあ
 人あまあ
 ねもあま
 ぬもあま
 ぬもあま



後鳥羽院
 人もね
 ひとま
 らら
 め
 あま
 世代もあ
 ありまら

けりて携る事
 なく能く徳を
 おとす法を
 うのこころ
 あはまゆす目
 孫のつとめ
 なるに法を
 内様あり
 女大寺終



明治十九年四月八日 出版御届
 同 五月 出版

定價金二拾弍

編輯人不詳

東京府平民

出版人 井上勝五郎

京橋區南紺屋町壹番地

賣 捌 全國各書肆

新刊西人書
卷之十一
十一

